

「3つの対話」でせまる造形的な表現活動
～多様な素材体験を積み重ねて～

1. 研究テーマ設定の理由

(1) 学校提案とかかわって

図画工作科は、造形的な表現活動を通して、つくりだす喜びを感じながら、思いや体験に「自分のイメージ」をもち、「色」「形」を、「その組み合わせ」で表現し、情操を養うことを目的とする教科である。

本校の「学びをデザインする子どもたち」には、「対象」「他者」「自己」との対話を重視することが含まれている。そこで、造形的表現活動における「対象」「他者」「自己」との対話とは、どうかかわりを指すのかを改めて考えてみたい。

(2) 図画工作科がめざす子ども像

学習指導要領では図画工作科の目標を次のように定めている。

「表現及び鑑賞の活動を通して、感性を働かせながら、つくりだす喜びを味わうようにするとともに、造形的な創造活動の基礎的な能力を培い、豊かな情操を養う。」

「感性を働かせながら」という文言は、今回の学習指導要領で新たに加えられた。学習指導要領解説によると「感性」とは、「様々な対象や事象に心に感じ取る働きであるとともに、知性と一体化して創造性をはぐくむ重要なもの」であり、「これを手掛かりに児童は発想をしたり、技能を活用したりしながら、自他や社会と交流したり、主体的に表現したり、よさや美しさを感じ取ったりしている」とある。つまり、図画工作科では、児童は「感性を働かせながら」、「対象」「他者」「自己」と対話をしていると言い換えることができるのではないか。

石器時代の昔から、人は絵をかき、道具を工夫してきた。また小さい頃から身近な素材に働きかけ、紙に線を書いて意味付けたり、物を積み上げて形を構成したりする行為を重ねて成長する。つまり、表現することは人がもともと持っている欲求であり、能力であるということができる。そして人は造形的な表現活動を通して人間らしい感情を育てていく。

そこで、ヒトの進化のすじみちにそった自然素材へのかかわりを、典型的かつ系統的に積み上げていくことでより豊かで人間らしい感情が育つのではないかと考えた。

造形的な表現活動の基礎的な能力を身につけさせ、生活や社会に主体的に関わろうとする態度を育て、豊かな感情を育てるため、図画工作科で目指す子ども像を以下のように考える。

- 造形的な表現活動の基礎的な能力を身につけた子
- 表現活動を通して、生活や社会に主体的にかかわろうとする子
- 自らつくり出す喜びを感じる子

2. 図画工作科における「学びをデザインする子どもたち」

本校の学校提案は「学びをデザインする子どもたち」であり、このためには「3つの対話」が重要であると考えている。

すなわち、「対象との対話」「他者との対話」「自己との対話」である。

図画工作科で考えると、見たこと、体験したこと、想像したこと、など、表現したいことが「対象」であり、また、イメージしたことを表すための「色」「形」「その組み合わせ」といった表現方法や素材も「対象」である。

子どもが、何かを表現するとき、見たことや体験したこと、想像したことなどのどの部分を切り取って表現するのかわかりやすく選び取る作業の過程に「対象との対話」がある。素材や道具の特性を知り、効果的に使う方法を考える過程にも「対象との対話」がある。

表現する過程で、友だちの発想や表現方法にヒントを得たり、教師の助言を取り入れたりする過程に「他者との対話」があり、できた作品を見て、他者の表現のいいところをお互いに評価し合う場面にも「他者との対話」がある。このようにお互いの表現のいいところを見つける活動を積み重ねることで、自分もった「イメージ」をより分かりやすく「他者」に伝えようとしたり、作品を見て、作り手がどんなイメージを表現しようとしたのかを読み取ろうとしたりする「作品を通しての他者との対話」が生まれる。

加えて、自分がイメージしたことを表現できたかどうかをたえず自己に問い直したり、表現手段を発見・工夫したりして、自分が納得する表現を追究していく「自己との対話」がある。図画工作科における「自己との対話」とは、「対象との対話」「他者との対話」を行う過程で、テーマやイメージ、表現方法を考え直したり、再確認したりする過程と言える。しかし、図画工作科で「自己との対話」が最も課題となるのは、自意識を確立していく思春期以降ではないかと考える。自分の表現活動を通して、自分はどのような存在なのかを問い直していく過程こそ、本当の自己との対話の価値がある。

指導者は、表現活動の過程を大切に、工夫やつまづきに注目していく。また、表現したものをもとに話したり、発表したりする場を保障し、子どもたちの変容を見取っていくようにする。

	低学年	中学年	高学年
課題解決	身近にある多様な素材にかかわり、自分なりの発見や気づきをする	見通しを持って表現活動に取り組み、主題性のある作品をつくらうとする	主題性を追究した作品に取り組もうとする
対話	「対象との対話」に重心をおく活動	「対象」に加え「他者との対話」を意識した活動	「対象」「他者」に加え、「自己」に問いかけていく活動
学び方	多様な素材体験の中で、感覚・感性を育て、	多様な表現方法や、他者の感じ方やイメージに触れ、	素材や表現方法の知識をひろげ、「伝える」ことを意識

	言葉などで感じや気づきを表す	他者を意識した表現をしようとする	して、主題性を追究した表現をしようとする
--	----------------	------------------	----------------------

1年生では小麦粉粘土を題材として取り組んだ。それは、油粘土へかかわる様子を見てみると、触り始めは油粘土の固さのため、少量ずつで細工をしていたり、へらを使って切ったりする活動がおもで、ダイナミックなかかわりになりにくいと感じた。そのため、柔らかさを調節できる小麦粉粘土を題材とした。

第1次では、小麦粉粘土の造形遊びをした。粉が手や腕についた様子を「凍っているみたい」「ミイラみたい」などと思いつきの言葉で言語化している姿が見られた。水を混ぜている段階では手にべとべたと付くが練っていくと付きにくくなっていくこと、弾力性があること、匂いなどに気づきが見られた。「対象との対話」に重心をおく低学年の特徴がよく表れていた。

第2次「クッキー屋さんになろう」では、「他者との対話」を期待し、「お客さんが喜ぶクッキー」という「作品を鑑賞する他者」意識をもたせるテーマ設定をし、合わせて、いっしょにものづくりを工夫する環境として3人グループを作り、それぞれ3色の食紅を混ぜた小麦粉粘土を作り、その粘土を3人で交換し合っ、色や形を工夫したクッキー作りをした。3人で取り組むことで、色の組み合わせ方やデコレーションに仕方をお互いに見て、影響し合うグループもあったが、活動の中心は、自分が練った粘土をどう形にするかであった。また「相手意識」を持続させるよりも「自分がほしいクッキー」がテーマになっていた。やはり1年生では、「他者との対話」よりも「対象との対話」を十分に楽しませることが重要だと感じた。今後は、「対象との対話」を中心にしつつ、「相手意識」をも意識させるような環境を整えることも必要である。

3. 研究の展望

・多様な素材体験に関わること

図画工作科は、表現することを目的とするだけでなく、「表す」活動の過程で表現対象であるものや経験を追体験し、対象に対する認識力を高め、表現手段である色・形、素材への認識力も高める。

感じたことを多彩な色や形を自由に駆使して表現することで人間らしい感情を育てる。

人間の進化の過程には、手や道具を使っての自然素材への主体的な関わりが欠かせない。

しかし、生活環境の変化により、自然素材に関わる機会は少なくなった。そこで、基本的な自然素材である草木、土や石に紙などを加え、これらを手や道具を使って加工する多様な機会をもつことを大切に取り組む。

・表現活動がもつ「対話性」に関わること

低学年では、身近にある多様な素材体験を積み重ねることや、他教科・領域との合科的な

取り組みなどの体験により、「対象との対話」を深め、感覚的な基礎を養いたい。気づきや感じを「自分なりの言葉」や造形的表現で表す喜びを味わわせたい。

中学年では、「他者」とのかかわりの中で、友だちの表現のいいところを見つけ、安心して表現し合える仲間づくりをしていく。その活動を積み重ねることで、「他者」に思いや感じを「伝える」ことを意識した表現にも取り組ませたい。「伝える」ためには、自分が伝えたいことを強調したり、単純化したりして分かりやすく表現することを意識しなければならない。

作文指導に例えていうならば、日常的に作文を読み合っていると、子どもたちの文の書きぶりが読み手、あるいは聞き手を意識したものに変わってくる。同じことが図画工作の作品でも言えるのではないかと考える。

鑑賞の機会を多く持つようにするほか、特徴をデフォルメしたり、単純化したりする表現としてマンガも1つの手段として取り入れたい。マンガは、日本が世界に誇る芸術文化であり、世界中の子どもだけでなく、大人も魅了するマンガを授業の中に取り入れたいと考える。

高学年では、9歳の節目を越えた子どもたちに、自分の感じやイメージをより一般化できる表現方法を工夫させたり、主題性を追究した表現活動を通して自分をふり返ったりする活動に取り組ませたい。

4. 研究の評価

・自然素材について

どの素材でどのような学びがデザインできるのかは、その素材を使った作品や、言葉や動作での作品の説明やお話などから、また、発見や気づきを表現する言葉が多様になることは、感覚や情操を養うことにつながるのではないかと考える。

・表現活動における「対話性」について

「対象との対話」について

同じ「対象」にはたらきかけても、その感じ方や気づきは、多様である。多くの気づきや発見がある「対象」こそ価値のあるものだとするならば、どのような対象にどのように出合わせることで多くの気づきや発見をうながすのかを研究したい。

「他者との対話」について

できた作品や美術作品の鑑賞の機会をもつ時、どのような鑑賞の視点を与えるのか、また、相手に伝えることを意識した表現に適する題材設定について研究したい。

「自己との対話」について

低学年では、自己の主題性に気づくだけの発達を充分遂げておらず、主たる課題ではないと考えるが、「自分がイメージしたこと」を完成度を気にしないでのびのびと表現する楽しみを実感できる題材について研究したい。